

昭和十六年五月十五日發行

# 貸出禁止

○ギルナール山の善那教寺院○スワミ・ボーン師歓迎會  
○第五回印度研究會○印度兵の教育○印度の軍需工場

●印度の現在及將來……………  
●昭和十五年度後半期對印度南洋貿易概観……………  
●印度工業化の基礎的問題……………  
●印度の人口問題……………  
●日本の蹶起に期待す……………  
●大東亞共榮圈と印度……………  
●現代印度政界群像(三)……………  
●印度回遊五千哩(三)……………  
●ネール自傳(五)……………  
●印度の俳優と藝妓……………  
●新興阿富汗斯坦の現状……………

●印度人労働者訓練案○印度の航空工業○産業會議○労働者訓練○一九四一年度豫算と増税○印度の軍備○  
プーラバイ・デサイの演説○學生の罷業を繞る論争○サブール博士の聲明○自治領制施行の時期○エム・エ  
ヌ・ロイの新黨○獨立労働黨大會○印度教徒青年會議○地方自治政府會議○ヒンヅー・マハサバの計畫○印  
度が第一○國內の騷擾激化○印度に於ける英國の利権○スバス・ボースの失踪○ジナーの聲明○印度棉花  
最終豫想○外十七件……………

◎印度便り……………  
○甲谷陀(一件)○孟買(三件)○ワルダ(二件)○アーメダバッド(三件)○マドラス(二件)○ナグプール(二件)  
○タタック(一件)○パトナ(一件)○ブリーナ(一件)……………

◎會務記事……………  
○大阪支部主催印度研究會○山口孟買領事送別會○副島專務理事の大阪出張○スワミ・ボーン師の來朝○來  
朝印度人斡旋○會員の計報○寄贈出版物……………

# 日印協會會報

第七十五號

## 日本の蹶起に期待す

E・I・E・M・S・A・I

歐洲に於て獨英決戦の危機切迫するや、太平洋には日米或は日英の危機到來説が頻に傳へられ、世界の情勢は今や東亞諸民族蹶起の秋近きを示唆して居る。時恰も日本の首都東京に於て東南亞細亞民族解放同盟が結成され、東南亞細亞に於ける被壓迫民族解放の大運動展開の氣運が醸成された事は、亞細亞諸國民の爲に最慶賀すべき現象である。私は被壓迫國民の一員として、此同盟の結成に盡力せられた世話人諸氏に深甚の謝意を表すると共に、將來渾身の努力を以て同盟の趣旨達成に協力し度いと考へるのである。世話人諸氏の中には十分なる經驗と地位とを有する多數の大政治家が加はつて居られるのであるから、此同盟の成功は毫も疑を容れないと思ふ。

印度は目下英國の帝國主義的搾取の下に呻吟して居るが、英國は嘗て印度侵略を開始して以來、約二百年の久しきに亘つて、印度の誇りとする總ての物を剝奪し去つた。今や印度は政治的打破する事は全く不可能であり、印度に於ける英國の勢力が完全に消滅するであらうと云ふ事を知る者は極めて少い。一般人はガンヂーの所説を輕視し、最も無意味の理想主義として片附けて了ふ傾向がある。

今や日本は民族の再興と國民組織の再編成を目的とする所謂新體制運動に向つて邁進して居る。従つて日本人が好意を以て印度の運動を研究されたならば、其本質を理解する事は極めて易々たるものであらう。約言すれば、ガンヂーが二十年に亘つて唱道し實行し來つた所の運動は、其本質に於て日本の新體制と全然其揆を一にするものである。印度は完全に武裝を解除せられて居るのであるから、武力を以て英國と争ふ事は出来ない。ガンヂーは英國が印度を統治して居るのは、英國の實力と言ふよりも、寧ろ印度人の力を巧に利用して居る爲であると云ふ事實を知つて居る。若し印度人が英國政權に對する協力を拒絶したならば、英國の勢力は忽ち崩潰を見るであらう。併し其實現は決して容易の業では無い。其前提として現在以上の訓練と準備とが必要である。何となれば、其方法は印度の指導者達さへ知らなかつた新しい政策であり、殆ど飢餓の状態に在る國民大衆に對して、更に尠からざる經濟的負擔を課する結果に陥るからである。

日本の蹶起に期待す

(六一)

には勿論、經濟上でも教育上でも、全く英國の奴隸と化して了つた。英國は印度を荒廢せしめる爲に有らゆる手段を講じた。斯くして彼等は相當の成功を收めたに拘らず、毫も印度の文化的、精神的遺産を奪ふ事は出来無かつた。我々が今日迄極東を護り通す事を得たのは、一に自己の實力に依つて英國の權力に對抗した爲であつた。聖雄ガンヂー及國民會議派指導下の印度は、過去二十年に亘つて自由解放への途を撓み無く進軍し續けたのである。不幸にしてガンヂーの運動の力と價値とは、印度以外に於ては殆ど一般人の理解する所となつて居ない。否印度に於てさへも、ガンヂー主義の本質を理解せぬ人々が尠からず發見されるのである。最近二十年間に印度を襲つた混亂と騷擾の跡を研究し、其根柢に横はる眞の意味と精神とを究めんとする者は殆ど無い。若しガンヂーの政策が十分に實行されたならば、假令英國が如何なる優秀の武器を持つて居つても、之を

ガンヂーの運動を妨げる最大の障害は、英國人の教育を受けて文化的にも精神的にも英國の奴隸と化した人々である。ガンヂーは能く之を知つて居る。彼等は知識階級と稱せられて大衆に影響を與へ得る地位に在るが故に、印度解放運動に取つては最恐るべき敵である。ガンヂーは印度國民が歐米物質文明の惡影響から完全に解放されなければならぬと信じて居る。印度國民が印度人らしく無く、印度の文化や文明の眞價を知らず、徒に英國の文化と組織とに憧れて居る限り、印度の眞の自由は到底望み得ず、又例へば印度が自由の國となつた曉に於ても、其自由を維持して世界の進歩發達に貢獻する事は出来ない、ガンヂーは考へて居る。従つてガンヂーの目的とする所は、單なる印度の政治的自由のみで無く、教育ある中産階級を文化的奴隸状態から救済するに在る。一九二〇年に開始された彼の運動は、印度文化の復興と印度人社會の淨化を目指すものであり、彼は之に依つて印度の健全なる發展を計り、再び人類に對する貢獻を爲さしめようとしたのである。

以上の諸點より觀察して、印度の國民運動が日本の新體制運動と同種のものであり、其目的に於ても亦全く同一のものである事が判然看取し得られるであらう。日本は明治維新以來賞讃に値すべき幾多の事業を完成した。爾來日本は新生の歴史を記

録し始めたのである。日本は諸種の點に於て世界の耳目の焦點となり彼等の賞讃を博した。其中には特に亞細亞の諸國民が賞讃し驚嘆せずには居られない事柄も尠くは無かつた。一九〇五年露國に對する日本の大勝を聞いた亞細亞の諸民族は擧つて日本を賞讃し、同時に之に依つて非常な刺戟を受けた。我々は歐洲人の苛酷な暴政に惱む亞細亞の諸民族にも新しい生活が訪れたやうに感じた。大戰終了後の平和會議に於て、日本が人種平等を主張し、人種的差別撤廢を要求した時、亞細亞の諸國民は再び尊敬と讃嘆の聲を放つた。私は今回新に創立された東南亞細亞民族解放同盟の世話人及後援者の顔觸を知つた時、日本は再び亞細亞諸國民の賞讃を博すべき新計畫を開始した事を感じた。併し甚遺憾乍ら私は茲に日本が亞細亞諸國民の心を未だ十分に把握して居ない事實を認めざるを得ない。亞細亞の國々には日本の眞意を誤解し、苦悶して居る者が決して少く無い。例せば印度國民運動指導者の大部分は、支那に於ける日本の行動は、東洋を征服し隸屬せしめようとする日本の計畫の一部であると單純に信じて居る。故に私は印度國民の一員として、印度が日本の眞の目的を誤解して居る事を恥ぢ且つ悲しんで居る者である。

私は慎重に此問題を考へた。何度も何度も考へた結果、斯様

な誤解が一般的になつて居るのは、何處かに誤解を招く原因が潜在する事を信するやうになつた。若しさうで無いならば、日本が過去數十年に亘つて實行し來つた此大事業が、斯程不幸な失敗を招く筈が無い。然るに印度國民の亞米利加に對する態度を考へて見ると、其關係は甚良好である。一般印度人は米國に對して信頼と希望とを持つて居る。私は米國の帝國主義が其侵略的な點に於て決して英國に劣るものとは思はない。他國を支配しようとする野心に於ても亦英國以上である。比律賓は米國の帝國主義の現實の標本である。印度人は米國の帝國主義の犠牲となる爲に英國の羈絆を脱しようとする者では無い。然るに印度人が米國に對して非常な好感を懷いて居るのは蔽ふべからざる事實である。其原因は米國の輿論が印度の國民的要求に對して極めて好意的な點に在る。一九三〇年から其翌二年に亘り印度の國民鬭争が最劇烈を極めた時、米國からは百餘名の新聞雜誌記者が先を争つて印度に渡航し、遍く英國の殘虐行爲を視察して、之を本國に傳へた。之に反し印度の此國民鬭争に對して日本から派遣された報道員は絶無であつて、米國新聞の全面を塗り潰した此大問題に對しても、日本では僅に數行の價値しか認められ無かつた。斯くして米國は巧に印度の民心を掴んで了つたのである。

我々が承知して居る通り、亞細亞を搾取して自ら肥滿し強大となつた我々共同の敵が、痛烈に日本を誹謗し、日本の對支行動を歪曲して報道して居る。是は支那國民に對して非常の効果も擧げた。併し日本に對する誤解の原因は決して之のみでは無い。若し日本が確信を以て率直に其政策を發表し、毫も領土的野心は無く、被壓迫國民解放の爲に戰つて居るのであると、其立場を明瞭にしたならば、亞細亞の他の國民をして能く日本の眞意を了解せしめ、多くの協力者を贏ち得たであらう。

今や日本に於て東南亞細亞諸國民の解放を期する一大機關が組織された。其指導者中には著名な政治家や實業家多數を含んで居る。帝國議會の議員も居る。従つて此解放運動を一國の國民的運動と爲し、之を議會に反映せしめる事も可能である。印度國民が此事實を聞いたならば、遂には日本の眞意を了解し、欣然として日本の企圖する亞細亞再建の大事業に参加し、決して協力を惜まぬであらう。



日本の歌起に期待す

### タゴールに與ふ

私は詩人(タゴール)に對し、紡車を以て自ら絲を紡ぐ事を慈愼する。一旦戰爭に際せば、詩人は堅琴を措き、辯護士は判決録を措き、學生は其教科書を措くべきである。戰爭の終了後始めて詩人は眞の詩を作り、辯護士は判決録を開かなければならぬ。家が燃え上つて居る時は、總ての家族は屋外に出て消火に努力する。我等の周囲の總ての人々が食物の缺乏の爲に死に瀕して居る時、私に許さるゝ唯一の仕事は、其餓えた人々に食を與へる事である。私の確信する處では、印度は今や燃えつゝある家屋である。印度は饑餓の爲に死に瀕して居る。何となれば印度は働いて食物を買ふべき仕事を持たないからである。

我等の都市は印度では無い。印度は其有する七百五十萬の村落の中に生き、都會は其村落の上に生きて居る。村落は其財貨を他國から齎らして來るのでは無い。都市の住民は畢竟一種の仲買人であり、歐米の代理人である。都市は印度國民の膏血を絞る爲に過去二百年に亘つて其等の外國と協力して來た。私の信念に據れば、印度は日々貧窮の度を増しつゝある。此際我々が何等かの手段を講じなければ、印度は全く衰亡して仕舞ふであらう。

(ガンヂーよりタゴール宛書簡の一節)